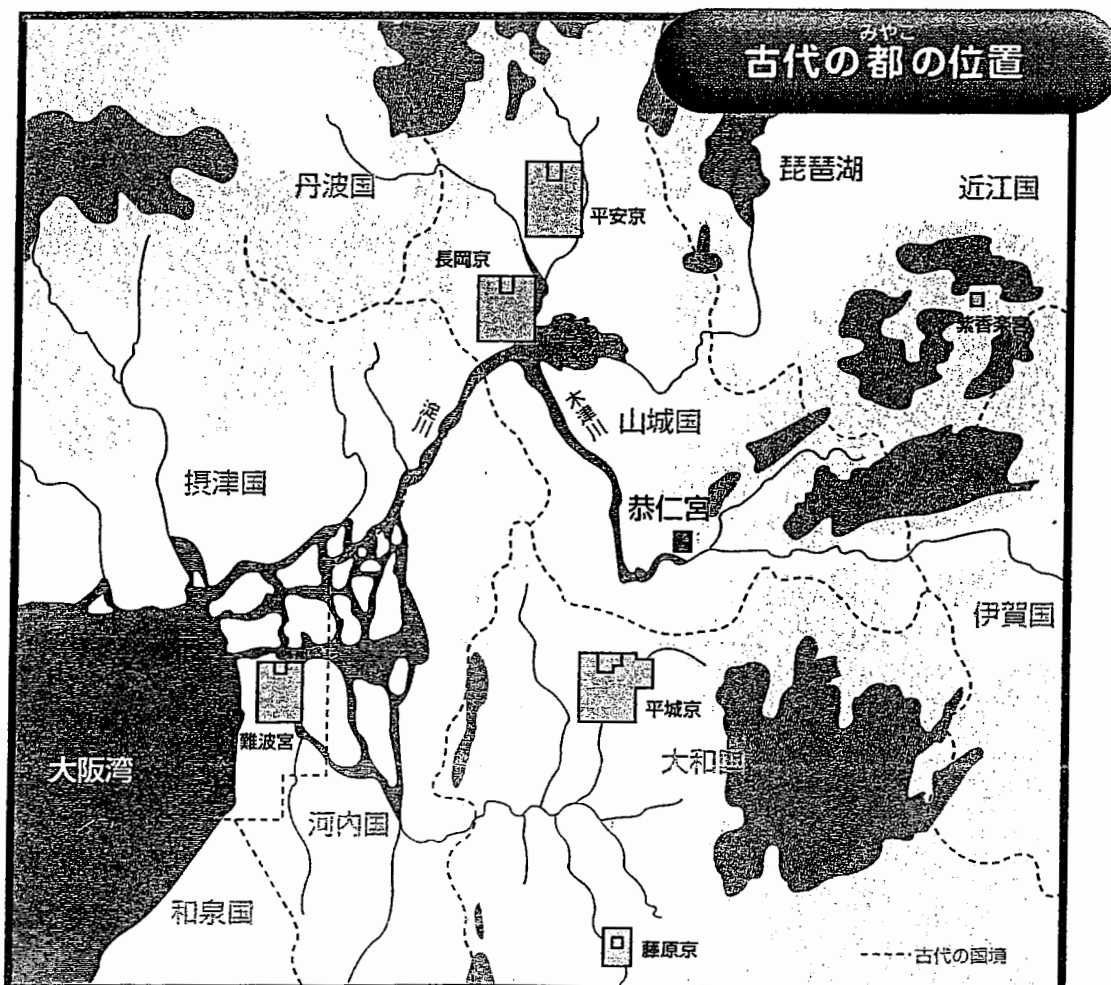


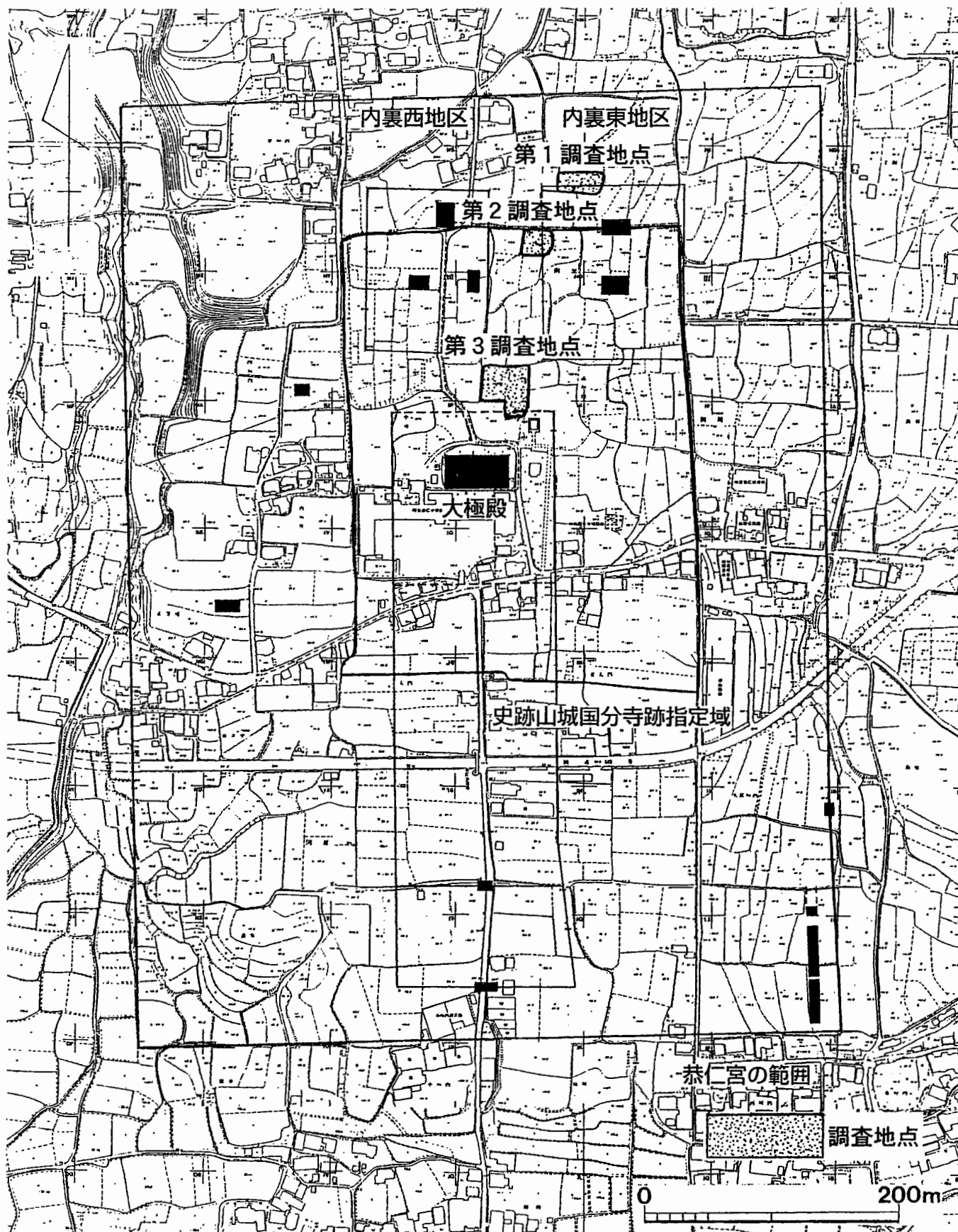
平成16年度
くにきゅうあと
恭仁宮跡発掘調査現地説明会資料
 京都府教育委員会
 平成16年11月27日

恭仁宮跡ってどんなところ？

恭仁宮は、相楽郡加茂町のみかのほら瓶原に造られた奈良時代の都です。
 今からおよそ1300年前の和銅3(710)年に、元明天皇によって平城京へいじょうきょうに都が造られました。それから30年後の天平12(740)年の12月、聖武天皇が新しい都の造営を始めます。これが恭仁京と呼ばれる都で、その中心が「恭仁宮」です。

宮の中には、主に天皇が暮らし、さまざまな儀式などが行われた所だいり(内裏)や政治など国家の儀式が行われた所だいごくでん(大極殿・朝堂院)、役人たちが仕事を行った役所かんが(官衙)など、国のなかでも最も重要な施設が造られました。恭仁宮を中心とする加茂町・木津町の一帯は聖武天皇の時代に一時期ですが、国の首都となっていたようです。そのわずか4年後の天平16(744)年には、都は大阪の難波宮へと移り、さらには再び平城京へと戻されました。恭仁宮は短い役目を終え、その後やましる、山城(山背)国分寺へと生まれ変わりました。





第1図 恭仁宮跡の全体図

これまでの調査で分かっていること

京都府教育委員会では、昭和48年度から恭仁宮跡の発掘調査を行っています。これまでに内裏や大極殿、朝堂院などの建物跡などがいくつか見つかっていて、宮の中がどのようなになっていたのかも少しずつ分かってきています（第1図）。

恭仁宮は東西におよそ560m、南北におよそ750mの大きさで広がり、周りを大きな土塀（大垣）^{おおがき}で囲んでいたことが分かっています。そして大極殿は宮内のほぼ中心に造られていて、高さ1mの大きな土壇の上に築かれた東西が約45m、南北が約20mもあった大きな建物でした。また、平城宮などでは大極殿の北側には内裏が造られていますが、恭仁宮では、この場所に東西に2つ並ぶ塀で囲まれた区画があることがわかりました。これは、その他の都では見られない恭仁宮だけのものです。今は、この2つの区画をそれぞれ「内裏西地区」・「内裏東地区」^{だいにしちく}と呼んでいます。「内裏西地区」は周りが全て板塀（掘立柱塀）で囲まれていて、東西が約98m、南北が約128mの大きさでした。「内裏東地区」は東・西・南の三方が土塀（築地塀）^{つじへい}、北側が板塀（掘立柱塀）^{ほったてばしらべい}で囲まれていて、東西が約109m、南北が約139mの大きさでした。

今年度の調査の目的は、①「内裏東地区」でこれまでに見つかっていた北側を囲んでいた板塀（掘立柱塀）が途切れることなく造られていたのかということ、②「内裏東地区」の西側の土塀（築地塀）の基礎工事（掘込み地業）^{ほりこみぢぎょう}の跡を確かめること、③大極殿の周りを囲んでいた施設（大極殿院回廊）^{だいくでんいんかいろう}を見つけることの3点です（第2図）。

今回の調査で分かったこと

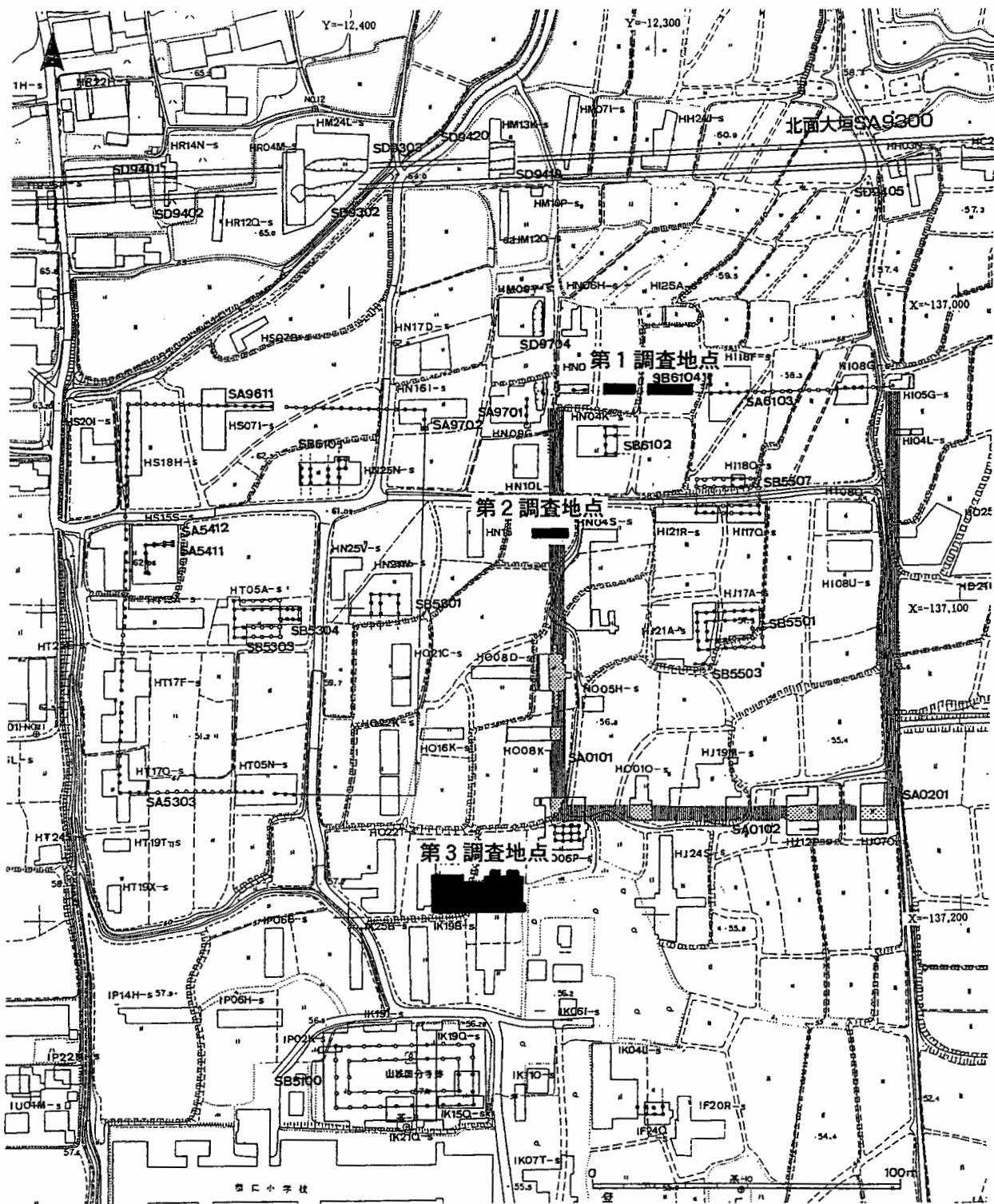
第1調査地点（第3図）

ここは「内裏東地区」の北側を囲んでいた塀が造られていたと考えられる場所になります。

これまでの発掘調査から、北側は板塀（掘立柱塀）で囲まれていたと考えられていて、東西の端と真ん中付近ではこの板塀の柱穴が見つかっています。この板塀が途切れることなく造られていたのかどうか、それを確かめるためにこの場所で調査を行いました。

調査によって東西に並ぶ四角い柱穴が10か所で見つかりました。柱穴は一辺が0.9mから1.5mの大きさでした。西端で見つかった2つの柱穴の間は3.6m離れていましたが、その他の柱穴の間はすべて3.0mでした。

この東西に並ぶ柱穴は、今までに見つかっている北側を囲む板塀（掘立柱塀）と真っ直ぐつながっていて、柱の間の長さも同じであることから、この板塀（掘



調査地点

第2図 今年度の調査地点の場所

立柱堀)の柱穴であると考えられます。従って「内裏東地区」の北側は、板堀(掘立柱堀)を造って囲んでいたことが分かりました。また、柱の間は4つ分がやや広くなっていることも分かりました。

第2調査地点(第3図)

ここは「内裏東地区」の西側を囲んでいた堀が造られていたと考えられる場所になります。

北側とは異なり、「内裏東地区」の東・西・南側は土堀(築地堀)で囲まれていたことが分かっています。以前に今回の調査地点の南側で行った調査で、西側を囲む土堀(築地堀)の基礎工事(掘込み地業)の跡と雨落ち溝(排水溝)が見つかっています。ですから、その跡が北側まで延びているのかを確かめるためにこの場所で調査を行いました。

調査地点の西端で南北方向の溝が1本見つかりました。これは以前に南側で見つかった溝を真っ直ぐ北に延ばした位置で見つかりました。幅はおよそ1.0m、深さは15cmから25cmで、北から南へとわずかに深くなっていました。これは、土堀(築地堀)の雨落ち溝(排水溝)と考えられます。しかし、今回の調査地点では基礎工事(掘込み地業)の跡は見つかりませんでした。すでに削られて無くなってしまったのか、元々造られていなかったのかは分かりませんでした。

第3調査地点(第4図)

ここは大極殿を囲む施設(大極殿院回廊)あるいは大極殿の後に造られた建物(大極殿後殿)があったと考えられるところです。

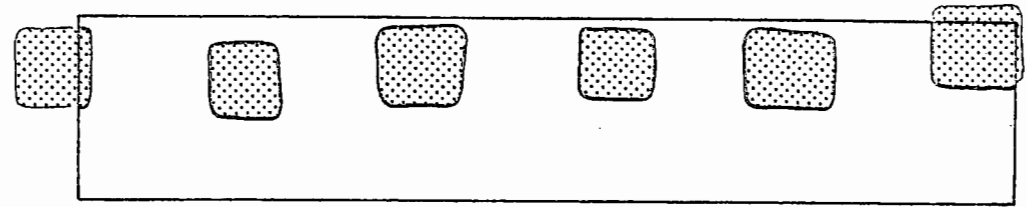
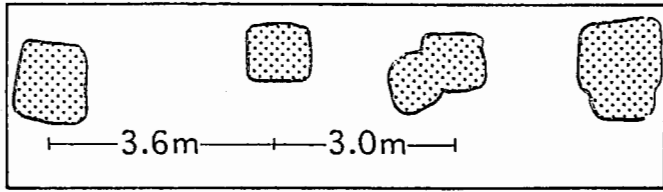
昨年の調査で南北に2.9m離れて並ぶ柱穴が2つ見つかったことから、この周りで柱穴がどの場所に掘られているのかを確かめるために調査を行いました。

同じような柱穴が北側と東側で見つかりました。1辺がおよそ90cmの大きさで、四角形に掘られていました。しかし、北端で見つかった3つの柱穴は同じように四角形でしたが、1辺がおよそ30cmと小さいものでした。柱穴の間は東西がいずれも4.5mで、南北は北から3.3m、5.4m、2.9mでした(当時の物差しは30cmでしたので、これらの柱の間はその倍数になっています)。

これらの柱穴は北側、そして東側へと広がっていると考えられ、全体の大きさは今回の調査では分かりませんでした。見つかった柱穴が大極殿を囲む施設(大極殿院回廊)の一部となるのか、1つの建物になるのか、それとも2つ以上の建物になるのか、また恭仁宮の建物なのか、山城国分寺の建物なのかいろいろなことが考えられます。

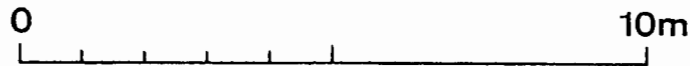
第1 調査地点

北側を囲む掘立柱塼の柱穴

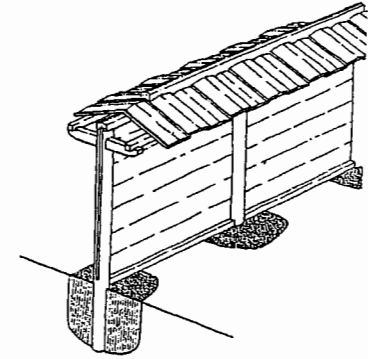


第2 調査地点

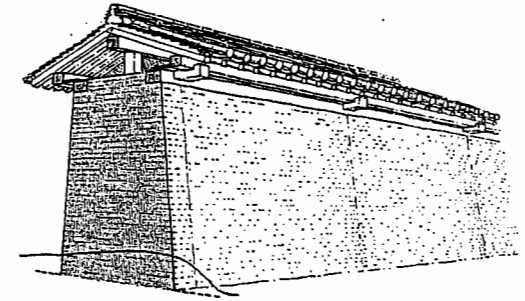
西側を囲む築地塼（土塼）
の雨落溝（排水溝）



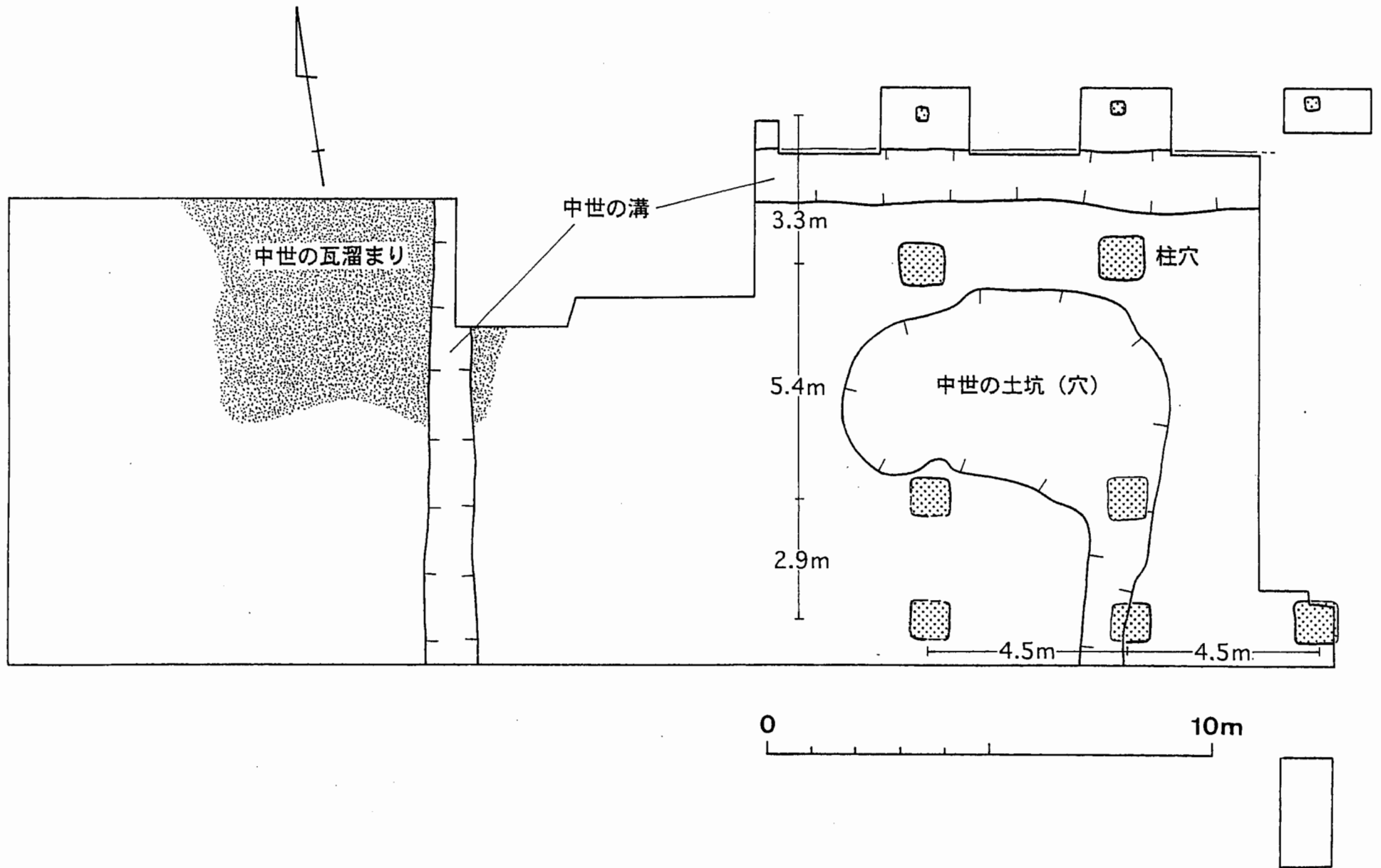
掘立柱塼



築地塼



第3図 第1・2調査地点で見つかったもの



第4図 第3調査地点で見つかったもの